

日蓮聖人『注法華經』研究ノート

——序品にみる引用經論の特徴——

今 井 真 孝

はじめに

古来より經文への注記は行われ、特に普及度の高い經文ほどその注記はさまざまな形式でされて来た(1)。

現在伝えられている日蓮聖人『注法華經』(2)は、これは版摺り法華三部經に日蓮聖人自ら經論積の要文を注記されたもので、その注記は經の見返し、表面の行間及び、余白、裏面全体に渡って行われ、僅少の余白を残す以外は悉く注記がなされている。その注記の總数は、合計二千一〇七章ある(3)。そのうち三章が他筆であり、これらは日興の筆と考えられているが定かではなく、この三章以外はすべて日蓮聖人の自筆である。その注記の方法は、ほとんど經論積からの引用で、日蓮聖人自身の文言は極めて僅少で日蓮聖人自身の解釈は全く見ること

が出来ない。また注記の内容については、本經の注釈としての注記、また注記の文が、本文とどのような関係にあるのか難解な注記もある。例えば、『法華文句』・『法華玄義』等の法華經解釈をしている書籍の引用、それに対して『高僧伝』のように伝記の引用もみられ本文にどのような関係があるのか難解なものもみられる。

注記のほとんどは天台三大部からの引用であるが、その他の中国天台宗関係の書籍からの引用、さらに日本天台の書籍を加えると引用經論の大半を占めるのが天台法華宗関係の要文である。日蓮聖人の教学上天台法華宗関係の要文が多いことは首肯できる。しかし引用經論の中には、華嚴・三論・法相・真言諸宗関係の經論積も多数引用されている。このような膨大な撰集注記が、どのような時期に、何の目的で作られたかについては、先師に

よってさまざまな検討がなされてきた(4)。いま諸説の概要を列挙すると次の如くである。

(1)日蓮聖人『注法華経』の成立年代については、二つの説が考えられている。それは、

- (a)立教開宗前後の説
- (b)佐渡期より身延期とする説

の二説である。(a)の説の由来は、江戸時代中期の文献、特に六牙日潮『本化別頭仏祖統記』(5)、建立日諦・玄得日者共著『本化高祖年譜』(6)等に見られる立教開宗前後、佐渡以前の作であるとする説である。また延宝九年(一六八一)開板の注法華経十冊の素稿を作った仏乗日愷は、その刊本奥書(開分四一丁)に、文応元年名越の草庵夜討ちの時、既に日蓮聖人『注法華経』が存在したことを示唆している。そして『日蓮聖人注法華経』(ピカタ再刊)編纂刊行に当たった河合日辰・北尾日大・加藤文雅三師(?)は、立教開宗に備えて、この撰集を行われたもの指摘し、この立教開宗前後説を説いている。

これに対して(b)説(8)は、片岡随喜氏が、筆蹟推考より身延期以後の注記であると断定し、また稲田海素氏も(b)説を肯定している。そして山中喜八氏は、まず筆蹟鑑定より、最も早い注記で文永九年以前には遡り難く、最

も遅いものでも弘安初年までに注記されていたとし、注記の大半は文永十一年より建治三年の期間のものとして推定している。さらに、注記の内容より次のように述べている。注記が開宗準備のためならば、浄土門関係の書籍も多数引用されているべきであるのにそれが少ないこと、それに対して密教関係は特に独自の主張を展開する文言が挙げられていること、したがって日蓮聖人一代において宗門普通の説に従うならば、密教に関する内容を含む引用文が多いことも首肯できること、等を挙げて佐渡期以後の撰集とするのである。

なお執行海秀氏(9)は、日蓮聖人『注法華経』の筆蹟から佐渡の成立としながらも『開目抄』には日蓮聖人『注法華経』からの引用と思われる節があることからすくなくとも『開目抄』以前(佐前)には成立していたものと考えられている。つまり日蓮聖人『注法華経』には佐前本と佐後本の二種があったとしている。

以上のようなことから、次のような問題点が取り挙げられる。

(1)前述したような問題点、すなわち現存のものが佐前の成立か、あるいは佐後であるか。

(2)玉沢本(現存)が、身延に安置された身延本と同一

のものであるか否か。

このような問題を考えつつ日蓮聖人『法華經』の成立について考察していかなければならぬであろう。

(d)次に日蓮聖人『法華經』の撰集の目的については、次の二点がある。

(a)諸宗対論破折のため、

(b)『法華經』の金言を持って、『法華經』の勝れたる

所以を明示するため、

がそれであるが、(a)説は、河合日辰氏が「日蓮聖人が、立教開宗に先立って、諸宗対論の依拠となる經論積の要文を前もって撰集注記された」(10)と考えられたこと、また山中喜八氏も、他日の公場対決に備えて諸宗破立の肝要を直弟等に伝えようとする意図があったとされたこと、これらにより撰集の目的が諸宗対論破折のためであるとする説である。

一方(b)説は、片岡随喜氏が、「法華經を能判、諸經論積の最要の文を所判とし、能判たる法華經の大海に諸經論積の文を注掃せしめるとともに、能判たる法華經の金言を以て所判たる諸經論積の所説を批判し、不了義經はその不了義たる所以、謬解はその謬解たる所以を法華經の本文に依って明かにして、それぞれの位置を定め誤謬

を匡された」(11)ことに由来する。さらに片岡氏は、そのような法華經の金言を持って諸經論積を会通されたことより、日蓮聖人『法華經』に日蓮聖人自身の解釈を注記されなかったのではないか(12)とされている。

またこのような二つの点を踏まえ、次のような目的もあったのではないかと考えられる。それは、日蓮聖人が長年に渡り仏教学研究に必要なるものを注記され、それを正確な記録として残すために作られた一種のノートの撰集であったと考えられる。したがってその注記に諸宗教義を破折する面(破邪)、自己教義を確立するための面(顕正)の二面が見えることも可能である。

ところで日蓮聖人が、法華經弘通・門下教育のために残された多くの遺文の中には、厖大なる經論積を正確に引用しえたことも、この日蓮聖人『法華經』が存在したからこそ成しえたことであると推察できる。また引用經論が、その書籍そのままの引用で、日蓮聖人の言文が見えないことは、日蓮聖人が法華經を最勝の經と位置づけ、依法不依人の立場からすれば、引用經論に私意を加えることは許されなかった。

以上のようなことから、日蓮聖人にとって經文への注記は必要不可欠なことであったと考えられ、日蓮聖人が

常に所持され、入滅後は身延の地に安置することを願ひ、直弟のために残されたことも首肯できる。

(ハ)しかしここでもう一つ問題になるのは、『宗祖御遷化記録』の御遺言に「同籠置^{トウリウジ}墓所^{トモ}傍^{トナリ}、六人香花当番時^{シクハナトウバンジ}可^レ披^ヒ見^ミ之^ノ」(13)と記してあるのにかかわらず、後の日興執筆『御遺物配分事』には、「註法華經一部十卷 弁阿闍梨」(14)と日昭に日蓮聖人『注法華經』が譲られたとし、それ以後は、今日まで日昭門流の重宝として伝持されている(15)のである。つまりどのような理由により、日蓮聖人の遺言を無視し、日昭に伝承されたかということが問題である。それはおそらく日蓮聖人入滅後、六老僧が相談上決定したと考えられ、そして権力のある者が良い物を取得できるという「自然説」をとったのではないかと推測できる(16)。これについて兜木正亨氏も「本弟子の中で、年令からいっても聖人の信頼度からいっても日昭に注法華經を与えられたことは極めて穏当な配分である。」と述べられながらも、一方では、日興が書かれた遺言が履行されなかった事について疑問を持たれている(17)。やはり『宗祖御遷化記録』の後に何らかの理由で六老僧が相談し、遺物の配分が行われ、日蓮聖人『注法華經』が日昭に譲られた、と考えるのが妥当であ

ると考えられる。

以上のように日蓮聖人『注法華經』には、成立年代・目的等さまざまな問題があるが、いずれにしても日蓮聖人『注法華經』は、日蓮聖人教学形成の背景を知る手掛りのひとつである。したがって日蓮聖人自らが注記引用された經論の内容も、法華經本文との関係を知るのと、遺文中に引用された經論積と、日蓮聖人『注法華經』とのそれを比較検討することは重要な課題であろう。かかる点を踏まえこの小稿は法華經二十八品の中、まず序品にみられる日蓮聖人の引用文の内容と、法華經本文との関係について検討し若干の覚書きをしたい。これに際し、山中喜八編著『定本注法華經』上下巻をテキストとして検討していく。

(一) 序品の引用經論の概容

法華經序品における日蓮聖人の引用經論は、見返しを含め第十一紙までの計十二紙にあり、第三紙の前半、第六紙の後半に約紙半分の余白をみる以外は、ほとんど行間に注記されている。その一行の文字数は、引用文字の少ないものから、多いものもあるが平均一行三十二字から三十三字で、この注記の中、見返しの『摩訶般若波羅

表 (I)

| 出典の種別 | 部数 | 引用数 |
|-------|-----|-----|
| 經律部 | 十 | 十五 |
| 論部 | 一 | 一 |
| 支那撰述部 | 十八 | 四十七 |
| 日本撰述部 | 八 | 十五 |
| 未詳 | 一 | 一 |
| (計) | 三十八 | 七十九 |

「蜜經」広乗品の文が日興の筆とされる一章を余いては、すべて日蓮聖人自身で書き入れたものである。
 ここで見返しから序品(表面のみ)までに見られる引用経論の種別、引用数をみると表(I)のごとくである。
 見返しから序品までの引用書籍数は、三十八種数で、その引用注記数は、計七十九章である。さらに引用書籍名と、その引用箇所について調べると表(II)のようになる。

表 (II)

| 部 | 律 | 經 | 書 | 書籍名 | 著作者名 | 天台宗 關係 | 書籍引用箇所()内は引用数 | 引用数 |
|---|---|---|------------------|-----|------|-----------|--------------------------|-----|
| | | | 大般涅槃經 | | | | 如来性品()、梵行品()、師子吼菩薩品() | 4 |
| | | | 妙法蓮華經 | | | | 方便品() | 1 |
| | | | 摩訶般若波羅蜜經 | | | | 広乗品() | 1 |
| | | | 正法華經 | | | | 光端品() | 1 |
| | | | 阿弥陀三耶三仏薩樓仏檀過度人道經 | | | | 上() | 1 |
| | | | 觀無量壽經 | | | | 入法界品() | 2 |
| | | | 八十華嚴經 | | | | 十地品() | 2 |
| | | | 六十華嚴經 | | | | 入不思議解說境界普賢行願品() | 1 |
| | | | 四十華嚴經 | | | | 般若波羅蜜多品() | 1 |
| | | | 大乘理趣六波羅蜜經 | | | | | 1 |

| 計合 | 未詳 | 日本撰述部 | | | |
|----|----|---|--|-----------------|--|
| 38 | | 註無量義經 法華去惑 守護国界章 頭戒論 法華觀心四種釈 普通授菩薩戒広釈 一乗要決 授決集 | 最澄撰 最澄撰 最澄撰 円仁撰 円仁撰 安然撰 源信撰 円珍述 | ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ ○ | 卷二 (標題ノミ) (-) 卷中之上(-)、中之下(-)、下之下(-) 卷之上(-) 不現伝 中(-) 中(-) 卷上決四(-)、卷上経首如是決十八(三) |
| 79 | 1 | | | | 4 1 1 1 1 5 1 1 |

この表Ⅱ)を見るとわかるが、これら注記の書籍数三十冊の中、二十冊は天台法華宗関係の書籍で、その引用数は、七十九章中、五十六章が天台法華宗からの引用である。特に『法華文句』から十章、『法華玄義』から四章、『摩訶止観』から一章、また『法華文句記』から重複一つを含め十六章など天台三大部の疏釈を含めると天台三大部関係が多く引用されてがわかる。また日本天台の書籍は、『守護国界章』(五章)、『授決集』(四章)、『一乗要決』(一章)を含め七冊(十五章)が引用され

ている。この序品までにおいても引用経論の大部分を占めるものは、天台法華宗関係の要文である。しかし他の引用文については、華嚴(四章)、法相(三章)、また『摩訶般若波羅蜜経』など天台とは相はかれない立場にある経論釈も引用されている。さらにここまでにおいては、日蓮聖人自身の意見・文言は明記されていない。

(二) 序品の引用経論の特徴

序品に注記される経論釈の文の中、直接本文の語を注

釈している本文と関連深い引用文は少ない。その中で、序品では法華経が説かれる会座の前相を表して、その会座に集まる諸仏諸菩薩等の聴聞衆が多く登場する。しかしその中で注記されている経論釈にその名がみえるのは文殊師利菩薩、舍利弗、弥勒等が一、二箇所出ているのみである。しかし、それは引用文中のみに出ていて、その具体的説明については引用がなされていない。それに対して阿闍世については、八文が注記されている(18)。その中の一つに、

23 文句二云。普超経云。阿闍世。從三文殊^一。懺悔得柔順^二。忍。命終入^三寶吒羅地獄^一。即入即出生^三上方^一。得^二無生忍^一。弥勒出世時。復來^二此界^一名不動菩薩^一。後當^三作^三佛号^三淨界如来^一。其迹既爾。本豈可^レ量。說^二法花^一時預^二清淨衆^一。至^二涅槃時^一引^二逆罪者^一何異^レ迦葉^一於^二法花^一受^レ記。於^二涅槃^一不堪^レ付屬^上。不^レ可^レ下^レ迷^二惑^一其本^上也(19)。

という『法華文句』の文があるが、この文に代表されるように、阿闍世については詳しい引用がされている。この阿闍世についての引用文の多い理由として、謗法の五逆罪を犯した阿闍世が、釈尊(法華経)によって救われるということと密接に結びついていることによると考え

られるのである。謗法・五逆の成仏は、法華経提婆品に説かれる悪人提婆達多、竜女の成仏と共に日蓮聖人にとって重要な問題であり、そのため阿闍世については、御遺文にも多く引用されている(20)。謗法の罪からの救いということに重点をおかれている日蓮聖人にとって一闍提成仏にもつながる阿闍世の存在は大きく、また序品においてその会座に加えられている点も重視されている(21)。このように阿闍世についての注記が他の諸尊よりはるかに多い理由は、日蓮聖人法華経弘通における一つの大きな役割をはたす重要な証拠であるためであると考えられる。

また序品における引用経論の特徴として、華嚴に関係する引用が多いことが挙げられる。日蓮聖人は、『華嚴経』を『法華経』以外の諸大乘経の最高と見ている(22)。引用されている華嚴については、『大方広華嚴経』四十、六十(二章)、八十華嚴経と、『華嚴合論』の計五章の引用があり、特に『六十華嚴経』においては、その十地品の文が二紙に、三十七行にもわたる経文を引用している(23)。その内容は、『華嚴経』の第六他化自在天会の会中に、十方から来集した諸菩薩等の会衆を代表して解脱月菩薩が、十地の意義の説示を金剛藏菩薩に問

い、それを金剛藏菩薩が答える場面である。この『華嚴經』十地品の場面は、正に『法華經』序品において弥勒菩薩が大衆を代表して文殊師利菩薩に奇瑞の因縁の説明を問ひ、文殊師利菩薩が答える場面と相重なる。

また見返ししの『華嚴合論』の引用(24)には、『華嚴經』の毘盧舍那仏と、『法華經』応身釈尊の教主別についての引用がみられる。このように序品での華嚴に関する引用は、『法華經』と『華嚴經』の相似の面と、不相似の面があり、二經の比較が少しではあるがされている。

そして最後に、遺文中に引用された經論釈と日蓮聖人『注法華經』の經論釈を比較検討してみる。日蓮聖人『注法華經』第一卷の見返しの部分において、妙法蓮華經に具足の意味があることを示そうとするために、薩の字に具足、六などの意があることを引用經論にて示している。この部分の引用經論の書籍、引用文、順序が『開目抄』、『本尊抄』にみられる引用文とほぼ一致している。まず見返ししの引用文は(25)、

1 大經云。薩者名具足義。

2 欲聞具足道。

3 無依無得大乘四論玄義記云。沙者訳云レ六。胡法以レ六為具足義也。文

4 吉藏疏云。沙者翻為具足。

5 玄八云。薩者梵語。此翻妙也。

6 大論云。薩者六也。

であるが、『開目抄』には、此文に欲聞具足道と申は大經云、薩者名具足義等云云。無依無得大乘四論玄義記云、沙者訳云レ六。胡法以レ六為具足義也等云云。吉藏疏云、沙者翻為具足等云云。天台玄義八云、薩者梵語。此翻妙也等云云。付法藏第十三 真言華嚴諸宗の元祖本地法雲自在如來 迹に龍猛菩薩 初地の大型の大智度論千卷の肝心云、薩者六也等云云(26)。

と、引用されている。また『本尊抄』には、法華經云、欲聞具足道等云云。涅槃經云、薩者名具足等云云。龍樹菩薩云、薩者六也等云云。無依無得大乘四論玄義記云、沙者訳云レ六。胡法以レ六為具足義也。吉藏疏云、沙者翻為具足。天台大師云、薩者梵語。此翻妙等云云(27)。

と引用されている。このように、『開目抄』、『本尊抄』二書の引用經論は、ほとんど日蓮聖人『注法華經』の引用と同様な形式を以って引用されていることがわかる。

また阿闍世の注記については、前述したように日蓮聖

人『注法華經』においては、八文が注記されている。また遺文中には、『太田入道殿御返事』（一一一八頁）、『光日房御書』（一一五九頁）等にもみられるように、阿闍世が五逆罪を犯しながらも釈尊によって救済されるという経緯について述べられている箇所が多くみられる。しかしそれらの遺文の中、日蓮聖人『注法華經』に注記された引用文と同じ文は、日蓮聖人『注法華經』の27観經云。爾時王舎成。有二太子。名阿闍世。隨順調達惡友之教。

この『觀無量壽經』の文が、『一代五時繼図』（二四四一頁）には、

觀無量壽經云、爾時王舎大城有二太子一名阿闍世。隨順調達惡友之教。收執父王頻婆沙羅。幽閉置於七重室內一文。

とみられるように広汎して引用されているのみで、遺文にみえる阿闍世の引用は、ほとんど日蓮聖人『注法華經』の引用文とは違う。したがって日蓮聖人は、前述したような日蓮聖人『注法華經』の注記を遺文にそのまま引用された事実と、この阿闍世の引用にみえるごとく日蓮聖人『注法華經』に注記したのみで遺文には引用されない場合もあることが、この阿闍世の一例ではあるが同

うことができた。

おわりに

以上のように日蓮聖人『注法華經』序品にみられる引用経論について簡単ではあるがその特徴について検討してきた。序品における引用経論の特徴として、天台関係の書籍の占める割合が高い点が指摘できる。そして『法華經』における序品の役割は、これから『法華經』の大法を説く序として、説法の前相を示す重大なものであり、この点で序品で弥勒の問いに対して文殊が答えるという形式をとるのに対して、『華嚴經』では解脱月菩薩の問いに対して金剛藏菩薩が答える場面が注記されていることは興味あるものといえるだろう。そして序品では多くの諸尊が列挙されるが、注記される経論釈には、ほとんどそれらの諸尊と関わり合いのある文はみうけられないといえる。その中で、阿闍世王に関するものとして八つの文が注記されており、この点で日蓮聖人教学における阿闍世王の重要性を再認識されることができよう。

今回は、日蓮聖人『注法華經』にみられる膨大な注記の中から、『法華經』序品という極めて限られた部分の検討を行ったのみであるが、これからさらに方便品以下の注記について検討を進めていきたい。

文中引用の日蓮聖人遺文は、『昭和定本日蓮聖人遺文』に拠り頁数のみを表記した。

- (1) 法華經への注記は、中国の劉虬(四三八〜四九五)が作った『注法華經』、また伝教大師最澄も現存はしていないが『注法華經』(十二卷)を作られたといわれる。他に『注勝鬘經』(一卷)、『注涅槃經』(七十一卷)、『注無量義經』、親鸞の『阿弥陀經註』・『觀經註』等がある。
- (2) 日蓮聖人が注記された法華經を、「注法華經」と呼ぶことについては、いささかの問題がある。なぜならば、日蓮聖人以前にすでに『注法華經』が存在し、また日蓮聖人自身「注法華經」と呼んではない。ただ『御遷化記録』に「私集最要文名『注法華經』(宗全二卷一〇五頁)とあるが他の遺文を調べても日蓮聖人自身が「私集最要文」、「注法華經」という字句も見ることができない。兜木正亨氏は、そのことを踏まえた上で「書き入れ本法華經」と呼称されたが、ここでは他の『注法華經』と区別するために日蓮聖人『注法華經』とする。
- (3) 山中喜八編著『定本法法華經』下巻解説参照。
- (4) 日蓮聖人『注法華經』に関する研究論文をいくつか挙げてみると、執行海秀稿「日蓮聖人の『註法華經』について」(『日本仏教』第二号所収)、兜木正亨稿「私集最要文・注法華經の題名と相伝―日蓮聖人書き入れ法華三部經―」(立正安国会『日蓮聖人真蹟集成』第七巻所収)、同者稿「書き入れ本法法華經」(岩波古典文学大系「親鸞集・日蓮集」解説所収)、山中喜八稿「注法華經解説」(京都本満寺発行「私集最要文注法華經」下巻所収)、同者稿「注法華經私考」(『大崎学報』第一〇九号所収)、同者編著『定本法法華經』下巻解説等があり、これらの中に成立年代、目的について検討されている。
- (5) この『本化頭別頭仏祖統記』巻三に、建長四年下総東漸寺に開藏の時、「撰註法華經開結共十卷矣。」(『日蓮宗全書』八二頁)と述べている。
- (6) この『本化高祖年譜』は、「建長七年大士三十四歳。著註法華經。」(『日蓮宗全書』三八頁)と伝えている。
- (7) 日辰師所有手沢本註法華經書入・「註法華經一斑」(ピカタ再刊『日蓮聖人註法華經』別巻五頁)・「註法華經出版の趣旨」(同上別巻巻頭二九頁)参照。
- (8) 山中喜八編著『定本法法華經』別巻解説参照。
- (9) 執行海秀稿「日蓮聖人の『注法華經』について」(『日本仏教』第二号所収)参照。
- (10) 河合日辰稿「註法華經縁起」(ピカタ再刊『日蓮聖人註法華經』別巻所収)参照。
- (11) 山中喜八編著『定本法法華經』下巻解説、「三、撰集御注記の目的」参照。

- (12) 山中喜八編著『定本注法華經』下巻解説、「三、撰集御注記の目的」参照。
- (13) 『日蓮宗宗学全書』（以下『宗全』と略称）第二巻一〇五頁。
- (14) 『宗全』第二巻一〇七頁。
- (15) 『宗全』第一巻一二頁。
- (16) 日蓮聖人『注法華經』の伝承問題については、宮崎英修先生の御教授をいただいた。
- (17) 兜木正亨稿「私集最要文・注法華經の題名と相伝―日蓮聖人書き入れ法華三部經―」（立正安国会刊行『日蓮聖人真蹟集成』第七巻所収）参照。
- (18) 日蓮聖人『注法華經』序品にみられる阿闍世王に関する特徴的な注記については、原慎定氏の日蓮教学研究所研究生研究会の発表を参考とした。
- (19) 本稿にみえる日蓮聖人『注法華經』の引用文は、山中喜八編著『定本注法華經』（以下『定本注經』と略称）よりの引用である。ここは『定本注經』六七頁。引用文の上の数字は、『定本注經』に附されている各巻ごとの一連の番号である。
- (20) 『太田入道殿御返事』（一一一八頁）、『光日房御書』（一一五九頁）等にみられる。
- (21) 『撰時抄』（一〇〇三頁）。
- (22) 『開目抄』（五五〇―一頁）。
- (23) 『定本注經』56、（七六一―九頁）。
- (24) 『定本注經』10、（六三頁）。
- (25) 『定本注經』1、6、（六二頁）。
- (26) 『開目抄』（五六九―七〇頁）。
- (27) 『本尊抄』（七二―一頁）。